

私の体験的中日比較関係論

彭 広 陸

彭：ただいまご紹介にあずかりました北京大学の彭と申します。本日はお忙しい中を大勢の方々にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。駿河台大学でお話をさせていただく機会に恵まれまして、大変光栄に存じます。廣野先生をはじめ、関係者の皆さまに厚く御礼申し上げたいと思います。

実は、廣野先生からお話を頂いたときは、私は、ただ学生向けの講演じゃないかと気軽に考えていました。まさかこんな立派な会場でこんな大勢の方、特に地元の方に大勢お越しいただき、大変驚いております。もうちょっときちんと準備しておけばよかったなと後悔しております。

「私の体験的中日比較関係論」というテーマになっておりますけれども、実はこれは廣野先生から与えられたテーマで、中日比較関係論となると私にとっては専門外で、何もそれについてお話をする資格はないと思うんです。ただ、「私の体験的」という枕詞というか、限定語が付いているから助かっております。一番悩んでいたのは、どこまでしゃべればいいのかということです。うちの大学には有名な学者、国宝クラスの大学者で、季羨林という方がいらっしゃいましたが、その方のおっしゃったことは、今やもう名言になっております。つまり「うそは一切言わない」。いつものことを言わない。ただし、本当のことは全部は言わない。本当のことを言うんですけども、全部しゃべるとまずい場合もありますから。私は今日はなるべく本音で語っていきたいと思います。

私の体験的ということですので、自分のことをまず自己紹介を兼ねて、簡単にお話をさせていただきたいと思います。

「日本語＝わが人生」というのはちょっとオーバーなんですけれども。というのは、私は13歳のときに日本語に出会ったからなんです。北京外国語学院付属外国語学校に入学したのは、今でもはっきり覚えているんですけども、1970年9月16日でした。当時はプロ文革の最中だったものですから、みんな途中で集まって、学校ま

で2時間ぐらい歩かされたんですけれども、つまり、歩いて初めて学校に行ったわけです。その学校はどういうところかという、ただの付属学校ではなくて、いわば外国語の人材を養成する学校みたいなところで、今でこそ外国語教育は普及しているので、例えば中国の大都会でしたら、大体小学校の1年生から英語なんかを習っているんです。遅くとも3年生からは、みんな外国語を習っているわけです。当時は、中学校に入ってから外国語を勉強することになっていたのですが、ただし、外国語の勉強は早いほうが良いという考えがあって、当時、中国にはそういう外国語の学校が7校ぐらいあったのです。北京には2校。私の居たところと、あとは北京外国語学校というところ、この学校の専任の葉先生が勉強なさった学校でもあるそうです。

あとは天津、上海、長春、武漢、南京、鄭州とかそういう街にも外国語学校というのがありました。私の通っていた学校は1959年に創立されたものです。学院というのは日本の学院とは違って、大学のことなんです、中国では。当時、単科大学はほとんど学院と呼ばれていたのです。例えば映画学院（映画大学）、美術学院（美術大学）、音楽学院（音楽大学）とか、そういう単科大学、単大は学院でした。あとは官庁所属の大学、例えば外交部、日本でいうと外務省なんですけれども、外務省所属の大学、当時は2校あったんですけど、北京外国語学院と外交学院でした。後者は今でも「外交学院」で、校名は変わっておりません。

北京外国語学院には、ただの付属学校というものもありました。それはその大学の教員の子弟が入る学校でしたが、私が通っていた付属外国語学校はそうじゃなくて、一般募集していました。そういうところで、たまたま私が入学したときは日本語科が新しく設置されたのです。それまでは英語、ロシア語、フランス語、スペイン語という4カ国語しかありませんでしたけれども、私が入学した年から日本語とドイツ語が新設されました。

当時は別に自分の意志で日本語を選んだわけじゃなくて、学校から一方的に「あなたはあのクラス」「あなたはこのクラス」というふうに振り分けられたのです。たまたま私の入ったクラスが、日本語を学ぶクラスただけなんです。その学校で5年半ぐらい勉強したわけです。勉強といっても、当時はプロ文革の最中だったものですから、ちゃんとした教育は受けられなかったと言っても過言ではありません。更に、日本語については、変な話なんですけれども、普通は最初は音声から習うわけですが、つまり五十音図を見て「あいうえお、かきくけこ」というふうに、そういう勉強をするのが普通なんですけれども、しかし私たちがいちばん最初に覚えさせられた言葉は「毛主席万歳、万歳、万々歳」だったんです。本当に今でもはつき

り覚えております。そこで5年半ぐらい勉強したんですけれども、完全に身に付いたわけじゃないです。

その学校は小中高一貫校なんですから、そこで一応高校まで勉強して卒業したわけです。当時は、ご存じかと思うんですけど、まだストレートで大学に進学できない時代でした。プロ文筆は1966年に始まったんですけれども、その年から大学の募集がストップになったんです。それから、70年からいわゆる労農兵出身の大学生を募集するようになりました。つまり高校卒じゃなくて、労働者、農民、人民解放軍の兵士から大学生を募集するようになったわけです。

私たちは当時、ほとんど全員下放されました。中国語でいうと「上山下郷 (shàng shān xià xiāng)」あるいは「插隊 (chā duì)」という言い方もしていました。要するに農山村、まあ人民公社に行かされて農民になったわけです。つまり農業に従事させられたのです。私の場合は、1年と数カ月間、当時の人民公社の社員たちと一緒に野良仕事をしていたら、運よく1977年に中国国際旅行社北京分社に入社できて、日本語のガイドになったわけです。

ちょうどその時期から日本からの観光客が急に増えてきたものの、当時は大学で日本語を勉強した人とか、日本語の分かる人が少なかったものですから、私が幸いに日本語のガイドになれたのです。そのときに、初めて日本の方と接するようになったわけです。1年と数カ月だけだったんですけれども、とても貴重な経験をさせていただきました。もちろん日本の観光客にも、日本のことをたくさん教えていただきました。

それから1978年に北京外国語学院に入学して念願の大学生になれました。今はその大学は北京外国語大学という名前に改称されております。本来ならば、修学年限が4年間のはずなんですけれども、ちょっと飛び級させられて、結局、実質的に勉強したのは3年間だけでした。

大学を卒業後、一時国家公務員も経験しました。もちろん当時は公務員の試験などありませんでした。勤務先は、中国語でいうと、「国家档案局 (Guójiā dǎng'àn jú)」、国家公文書局みたいなところでした。結局数カ月間だけでしたが、その外事処に勤めて、日本語の通訳を担当しておりました。それからまた受験して、大学院に進学しました。具体的に申しますと、1982年に北京大学の大学院の修士課程に入学してそこで2年半ぐらい勉強したわけです。修了したら自分の母校である北京外国語大学に戻って、日本語教師をするようになりました。

1987年になりますと、留学のために日本に渡りました。最初の1年間は早稲田大学

語学教育研究所に研修生として1年間在学していました。1988年4月から大東文化大学の博士後期課程に入学して、4年間勉強しました。それが終わったらまた北京外語大学に戻って、1995年までそこに勤めておりました。1995年から現在まで北京大学で教鞭を執っております。というような経歴でございます。

ですから、1970年から今日までは、かつて下放されていた1年間、つまり農業をやっていた1年間は日本語と全然縁がなかったんですけども、それ以外はずっと日本語を勉強したり研究したり、教えたりしてきました。ですから、私の人生は日本語を抜きにして語れないと言っても過言ではありません。

私にとって日本という国はどのような国かという、近くて遠い国というふう感じております。中日関係について「一衣帯水の隣国だ」と、一衣帯水という四字熟語がよく使われる昨今ですが、これはもともと『南史』——歴史の本なんですけれども——に出た言葉ですが、「隋文帝謂仆射高穎曰：我為百姓父母，豈可限一衣帯水不拯之乎？(Suíwéndì wèi púyè Gāojiǒng yuē: Wǒ wéi bǎixìng fùmǔ, Qǐ kě xiàn yīyīdàishuǐ bù zhěng zhī hū?)」と。隋文帝は隋の時代の初代の皇帝で、楊堅といって。その仆射(ボクヤ)というのは、今は多分内閣副総理大臣みたいな官名なんです。その人は高穎といって、隋文帝はその高穎に言うわけです。現在、中国でもよく役人のことを「父母官(fùmǔ guān)」というんですけども、昔皇帝がそういうことを言っていたわけです。つまり、「私は百姓の父母だから、一衣帯水に限られて、つまり、隔てられて、それを助けようとしないのはけしからん」と。つまり一衣帯というのは帯です。1本の帯のように狭い水、水域なんですけれども、これは川のことです。昔は、狭い意味では揚子江を指していたんですけども、要するに、川に隔てられてそれを助けようとしないのは駄目だと。つまり、川に隔てられていても助けなければならないという意味だったと思うんです。

要するに中国と日本の間は、もちろん海に隔てられているんですけども、地理的には非常に近い国なんです。でも、心理的な距離はかなり遠いと言えそうです。特に、先ほど廣野先生のお話にも出ていましたが、中国人と日本人は、お互い相手の国が嫌いになっている人がどんどん増えているんです。これはわれわれにとっては非常に残念なことなんです。ですから、いかにしたら心理的な距離を縮めることができるのかが、われわれにとっては大きな課題だと思います。

もう一つは指摘しておきたいことは、「似て非なり」ということです。つまり中国人と日本人は、見た目には非常によく似ているんですね。特に今は中国人がよく海外

旅行に行くようになって、例えば欧米の国なんかへ行くと、よく日本人と間違えられるそうです。欧米人から見れば、中国人か日本人か区別がつかないみたいですね。中国と日本の間柄について、「同文同種」という言葉がよく使われていました。確かに、お互いに漢字文化圏の国として、今正式の文字として漢字を使っているのは中国と日本だけのようですね。もちろん日本語の場合は、漢字だけではなくて仮名も使っています。「漢字仮名交じり文」というのが正式の文体です。確かにそういうふうに現象的に見れば、同じ文字を使っているように見えます。

同種というのは、もちろん人類学的に見れば同じモンゴロイドというか、子どもが生まれたときにお尻に蒙古斑という青あざが付いているのは中国人も日本人も一緒なんです。でも新しい研究によりますと、日本人はどちらかというとな方系で、中国人は南方系という説があるそうです。それはともかくとして、要するに同じ黄色人種としてよく似ています。非常に近いわけです。

日本語の系統についてもいろいろな説があるんですけども、やはり南方の言語の影響も受けているし、北方の言語の影響も受けているということです。例えば、日本語の語彙について、特に、語彙論の研究をする場合は語種という用語をよく使いますが、つまり語の種類、これは単語の出自に基づく分類なんですけれども、大体4分類されています。和語、漢語、外来語、混種語。和語は大和言葉なんです。漢語は唐言葉、音読みの言葉なんですけれども、もちろんその中の言葉は全部中国から伝わったわけじゃないんです。日本人によってつくられた、いわゆる和製漢語も数多くあるわけです。そういった漢語は逆に数多く中国語に借用されるようになってきています。特に近年、そういう傾向が著しいです。これは私の最近の研究テーマの1つにもなっていますけれども、中国が開放政策を取るようになってからは、日本語からもたくさんの単語を借りて使うようになってきました。

例えば日本料理名もそうなんですけれども、刺身なんかは漢字で書くと「刺身(cìshēn)」なんです。漢字をそのまま使っていますけれども、でも中国人から見れば、「cìshēn(刺身)」というのはどういうものなのか、字面を見るだけでは全然見当がつかないわけです。でもみんな平気で使っています。寿司なんかもそうなんです。回転寿司も中国で普及してかなり人気があるんですけども、つまり日本料理は中国ではかなりの人気を博しており、身近なものになっています。

そういう交流があるんですけども、でも、よく観察して見たら中国人と日本人の発想がかなり違うようです。これは例えば外国語教育をする場合は言葉そのものももちろん教えるんですけども、しかし一番難しいのはやはり発想なんです。ど

ういうふうに、例えば日本人の発想を理解できるのか。そこが大事なんですね。大体これが分からないと、コミュニケーションに支障が出るわけです。

話題が変わりますが、われわれ外国語教育に携わっている人間にとっては、やはり二国間関係というか、外交関係にとかく敏感なんです。だから外交関係に左右されやすい外国語教育というのが現状なんです。先ほど廣野先生のお話にもありましたけれども、日本では中国語を専攻する人がかなり減ってきているんです。多分どこの大学もそうなんですけど。逆に、中国の場合は、かなりの勢いで日本語学習者の数が増加の一途をたどってきました。

国際交流基金の2012年の調査によりますと、その調査結果は中国と台湾、香港、マカオ、別々に統計されているんですけども、私が見たのは速報で、中国と台湾の結果しか見ていませんので、だから正確な数じゃないけれども、中国大陸だけでも日本語の学習者は100万人以上居るんです。台湾を入れると127万9,000人余りという計算になりますけれども、香港、マカオを入れるともう少し増えます。

なぜ日本語学習者がそんなに増えていたのかについては、こういう解説が付いているわけです。中国において日本のポップ・カルチャーへの関心を背景にした学習動機や将来の就職等、経済的・実利的理由に支えられて、大学を中心に学習者が伸びています。これは事実なんです。われわれにとっては非常に好ましいことなんです。

これをご覧になってください。中国で一番人気のある大学の専攻のランキングなんですけれども、英語が1位でして、日本語は12位です。結構上位のほうだと思えます。かなり人気があるんです。当時は、日本語学科が設置されている4年制の大学は466校あったんですけども、今はもう500校以上にどんどん増えています。でも、昨年あたりからちょっと減ってきたのも事実なのです。というのは、やはり中日関係が非常に悪くなっているのです。特に私立の大学の場合は、多いときは日本語専攻の人が1,000人ぐらい居た大学は、1クラスもなくなっているところもあるそうです。ですから外交関係が悪くなるとすぐ外国語教育に影響が出てきます。これが現状なんです。

どこの国でもそうでしょうが、外交関係を決めるのは、やはりその国の指導者なわけですね。では、一国の指導者にどういうことが求められるかという、私から見れば、少なくともちゃんと自分の哲学を持っていないといけないんです。よく変わる人とか、あるいは自分のきちんとした考えを持っていないような人は駄目だということです。それからもう一つ、当たり前なことなんですけれども、大所高所に

立って国際関係を考えなければならない。つまり国際感覚を持っている人でないといけないんです。

それからもう一つ、国の大小と関係なしに相手の国を尊重しなければなりません。中国では今でも、日本のことに話が及ぶと「小日本、小日本 (xiǎo rìběn : 小さい日本)」という言い方をするんですけれども、これは非常に失礼な言い方だと思います。私は絶対、そういう言い方はしません。でも、一般の庶民の間では結構平気でそういう言葉を口にする人が居るんです。これが現状なんですけれども、国土の広さ、人口の多さと関係なくて、やはり相手の国の人々を尊重しなければならないと思います。

それからもう一つは、やはり長い目で両国関係を考えないといけないのです。目先のことにばかり囚われると、どうしてもその政策がおかしくなってしまうので、やはり長いスパンで考えてほしいものです。特に中国と日本は、2000年以上の友好の歴史を持っているものですから、仲良くしない理由は何もないと思います。

もう一つは、有事のときに冷静さを保つこと。

極端な例を挙げますと、例えば毒ギョーザ事件がありましたね。その事件が公になった当初は、中国の関係者が、これは絶対中国側の問題ではないと、言い切っていました。でも後で調べてみたところ、やはりギョーザの生産工場の労働者が毒を入れたことが判明されましたね。その人は死刑になったわけですが、きちんと調べもしないのに、ただ中国側の問題ではないと断言してしまうというやり方は非常にまずかったと思います。

それから例の漁船の衝突事件もありましたね。当時は、中国政府がその船長を英雄視して特別機を出してまで、その船長を連れて帰ったわけです。なぜ特別機を出さなければならないのか、非常に不思議に思いました。というのは、特別機で1回日本と中国の間を往復するのに結構なお金が掛かるわけです。そこまでする必要があるのか、一介の庶民の私には、非常に疑問に感じました。

もう一つは、やはり草の根レベルの交流は非常に大事だと思います。中国でも、特に中日関係が悪くなると、日本との交流はストップになりがちなのです。例えば去年でしたっけ、とある大学の話なんですけれども、結構大型の国際シンポジウムを開催することになっていましたが、日本の学者たちも航空券を購入していたのに、出発する1週間ほど前になって急に中止となって、みんな非常に困り果てていたとのこと。別に、ただの学術交流だから中止しなくてもよいのに、役人の連中は特に神経をとがらせて、何かトラブルがあると自分が責任を取らされることになるか

ら、だから事なかれ主義で対処したわけです。このやり方は建設的ではなくて、非常にまずいと思います。

あとはマスコミの功罪についてです。日本に来たらよくテレビを見たりしますが、日本のテレビでは、例えば中国人が日本大使館に投石するシーンが繰り返し放映されていますね。そういうふうは何回も何回も放送されると、どうしても視聴者に中国人は日本に対してあまり友好的ではないというイメージを植え付けてしまうんですね。だから、マスコミの影響はかなり大きいから、先ほど廣野先生もおっしゃったように、自分の目で見て、自分の耳で聞いて、それから自分の頭で考えなければいけないと思います。特に日本の場合は、何かあるとテレビにいろいろな方が出るんです。専門家ではないのに結構いろいろ勝手なことを言っている人も居るんですね。その人が自分の意見を述べるのは自由なんですけれども、ただし、それは事実かどうかです、本当のことかどうか分からないです。ですから、テレビを見ていてどうしてもそれを信じてしまうことがありますので、やはりマスコミの影響は大きいなと思います。

それから、建前と本音というのは見分けたほうが良いと思うんです。例えば中国ではアンケート調査をするときに、日本という国が好きかどうか聞かれたら、嫌いだと答える人がかなり多いようです。まあ、これは事実かもしれないですけども、実際には、例えば今の若い人は、日本のポップ・カルチャーの影響をかなり受けているんですよ。

つまり、口では日本という国が嫌いだと言っている人でも、結構日本の文化を愛容しているわけです。具体的にいうと、日本の漫画も読むし日本の音楽も聴く、日本のアニメも見るし日本産のゲームでも遊ぶという具合です。昔は、例えば1960年代のときに中国とソ連の関係が悪化すると、国同士の関係だけではなくて、一般庶民の生活の中でもソ連のことを一切排斥してしまう、完全に否定してしまうという時期があったんですけども、今風の若者はそうじゃないんです。口で言っていることと実際にやっていることは違うことが結構あるような気がいたします。ですからみんな多かれ少なかれ、日本のカルチャーの影響を受けていると思います。

それから相互理解の難しさ。われわれ日本語教育に携わっている人間は、別に親日派を養成する必要はないと思います。親日派というよりはむしろ知日派、要するに日本のことをよく知る、精通する人材を養成しなければならないと思いますけれども、その場合はまず相手の国の常識を知っておくべきだと思います。例えばうちの卒業生が日本企業の面接を受けたときに、1回目の面接にはパスしたものの、2回

目のときは落とされたんです。理由は何かと後で聞いてみたら、非常識だと言われたんです。北京大学の日本語学科の4年生ですら日本の常識を知らない。それは日本語教育の失敗だと言わなければなりません。われわれ教育者としても、責任を取らなければならないでしょう。やはり相手の国にとってはどういうことが常識なのか、どういうことが非常識なのか、まず知っておく必要があるように思われます。だからそういう教育が欠けているのではないかと思います。

もう一つは人的交流なんです。廣野先生は、ご専門は中国文学なんですけれども、中国のことをよくご存じなんです。やはり、実際に中国・北京に1年間滞在なさっていると、いろいろ本当のことがお分かりになるようになられたかと思えます。私自身も留学も含めて実際に何年か日本で生活していたものですから、日本の事情がある程度分かっているつもりです。なんといっても人的交流が大事なのです。特に若者同士の交流、これは胡耀邦（コ・ヨウホウ）時代は結構重視されまして、日本から3,000人ほど招待されていましたが、そういう交流は大きな意義を持っていると思います。まず話し合わないと意思の疎通ができないし、相手の考えも分からないから、交流が必要不可欠なのです。そして、百聞は一見にしかずということです。やはり現地に行って、実際に自分の目で見るのが大事なんです。一時は日本に来る中国人観光客が減っていましたが、最近は少しずつまた増えてきたようですね。実際に日本に来た人は、中国に帰ったら結構いろいろインターネットで書いていますが、どちらかといえば、やはり日本のことを褒めている人が多いのです。日本に来て、日本のことがさらに嫌いになっている人は、非常に少ないように思います。それまではあまり好きではなかったが、実際に一回でも日本に来ると、日本のことを好きになってしまった人がかなり多いと思います。ですから、中国人には日本にどんどん来てほしいわけです。

それから、中国の強さと日本の強さについてです。経済力の話となると、みんなよく GDP を話題にしますね。つまり、中国はもう日本を抜いて世界的に2位になっているということがよく話題になるんですけれども、このような比較はあまり意味がないと思います。2位になっても、1人当たりで計算すると中国のほうがずっと落ちるんです。だから、データの上では2位とはなっておりますけれども、私から見れば、それは見かけ上の強さという一面があるように思われます。

むしろ日本のほうが技術力が結構強いですね。中国の場合は、どういうわけか技術開発のほうにそれほど力を入れていないように見受けられます。あまりお金を掛けて開発しないし、外国からそのままもらってくるんです。外国からの技術導入にはお

金を使っても惜しまないようです。要するに自分のほうで新しい技術を開発しようという姿勢が欠けているように思われます。それに対して、日本の強さは、どんどん新しい技術を開発しているところにあるのではないかと思います。いつも感心しておりますけど。

それから資源のほうも、日本の場合は輸入に頼っている一面もあるでしょうけれども、中国の場合は、昔中国のことを「地大物博 (dì dà wù bó)」と、要するに土地が広いし、物が豊かという言葉でよく形容してきたんですけども、本当は中国の資源はそんなに豊かじゃないと思います。最近は輸入に結構頼っているところも多いし、特に1人当たりの耕地が少ないんです。それからどんどん都市化してしまって、耕地が減ってきているんです。だから中国も実際にはいろいろ深刻な問題を抱えているように思われます。

中国人と日本人を比較してみると、中国人は「差不多 (chà bù duō)」という言葉をよく使うんです。「まあまあ」というか「だいたい」とか。要するに中国人は大ざっぱなんです。いいかげんにするんです。一般論、ステレオタイプの言い方になるんですけども、日本の方はどちらかというと非常にまじめで、きちょうめんで何に対しても究めるんです。特に、日本の職人がそうです。いつもテレビを見て感心するんですけども、何を作るにしても、本当に自分の丹精を込めて一生懸命作っている姿勢にいつも頭が下がるんです。けれども、どちらかという、中国人の場合はこだわりに欠けているように思われます。何でもほどほどにしていいいかげんにする、そういうところがあるんです。ただし、日本の方は人と付き合うときに、結構細かいところを見るんですね。だからいつも学生に言っていることですが、自分の身なり、言動とか、細かいところに気を付けなければならないと。日本の方はそういう細かいところを見て人を判断する一面があるような気がいたします。

次の話題に移りますが、徐々に変わる国と豹変しがちな国ということです。私から見れば、日本は何か新しい制度を導入するときに、本当に時間をかけてゆっくりやっているんです。例えば週休2日制なんか何年もかけて徐々に移行してきましたが、中国の場合はそうじゃなくて、一遍に変わってしまうんです。上から一つの命令で、鶴の一声ですぐ変わってしまうんです。日本の場合は、例えば何とか料金が上がるときには前もって、だいたい前に公表するんですね。中国の場合はそうじゃないんです。あらかじめ知らせておくといろいろなとんでもないことになるから、急に今日発表して明日からもう値上がりするとか、そういうことが多いんです。だから中国はよく変わるんです。一遍に変わってしまうんです。

次に、法治国家か人治国家についてです。私から見れば、日本は一応法治国家なんですけれども、中国の場合はまだまだ人治国家という一面があるんです。一応法律はどんどん整備されているんですけども、でも法律があっても守らないケースが多いのではないのでしょうか。守らなくても罰せられないことが多いように思われます。時間の関係で詳しい話は省略させていただきます。

もう一つは、秩序のある国とない国。私から見れば、日本はやはり秩序がある国で、みんなちゃんと守っているという印象を受けております。しかし、日本で生活に慣れていて中国に帰ってみると、本当に腹が立つことが多いです。例えば、地下鉄に乗るときもそうなんですけれども、こっちがまだ降りていないのに、もう乗り込んでくるんです。駅のアナウンスで「先下后上 (xiān xià hòu shàng)」と、「降りる人が先に降りてから乗るように」ということが放送されているんですけども、誰も聞かない。だから地下鉄に乗るたびに腹が立つんです。情けない話ですが。もちろん観光も含めてどんどん地方から多くの人が都会に来ているんですけども、しかし、秩序やマナーを守らないのは何も地方からの人に限ったものでもありません。人間として最低限のルールやマナーを守らなければならないという教育を、学校も社会もしなければならぬのに、徹底してないのが現状なのです。

それから、見かけを重視する国と内実を重視する国。私から見れば、中国は見かけを重視する国なんです。メンツを大事にする国だと言われている通りだと思います。例えば地方の役人がどこかの、日本でいうと県知事、中国の場合は省長というんですけども、1つの省の省長になると何か業績を残したいわけです。だからそれは「面子工程 (miànzi gōngchéng)」というんです。メンツのプロジェクト。要するに自分が辞めても、必ず「これは私がやったことだ」と、そういう、誰にも見えるような施設とかを造りたいわけです。それが「面子工程」なんです。でもそれは膨大な予算が必要な場合が多いわけです。でも、そういう施設を造る必要があるかどうか、実際に役に立つかどうか、それは一切不問にして、ただ自分の業績として残したいわけです。そういうことが結構多いのです。そればかりではなくて、例えば何億円も掛けて造ったものが、何年も経たないうちに不要なものとして取り壊されたりすることまでよくあるんです。無駄遣いも半端ではありません。でも、それを造らせた人の責任は追及されない。その意味では、首長の考え一つで通らない、議会で審議されなければならない日本はましだと思います。

次に、中庸か極端に走りやすいかについて考えてみたいです。中庸については、いろいろな解釈が可能ですが、私なりの解釈によりますと、どちらにも偏らないと

ということです。中国の場合はどちらかというと、極端に走りやすい方ではないかと思えます。もちろん試行錯誤も許されるわけですが、でも何か政策をつくるときに、じっくり考えた上で決定するのではなくて、急いで新しい政策をつくって実行に移してしまうのですが、反対が多いとまた撤回してしまう、そういうケースも少なくありません。つい最近の例ですが、1年ぐらい前になるでしょうか、交通ルールで、黄色の信号が点灯されているときに、停車の線を越えたら交通違反になる、そういう新しい法律がつけられたのです。しかし、一旦それが頒布されて実施されてみると、さすがこれはおかしいぞと反対する人が多かったため、実施を取りやめたのです。これだと、法律の権威が落ちてしまう羽目になってしまいます。そういうことは、中国ではしょっちゅうなんです。

なにしろ、中国人は極端が好きなんです。例えばお芝居とか映画とかの場合は、いわゆる喜劇と悲劇がありますよね。中国人は極端な喜劇と極端な悲劇が好きなんです。これはだいたい前に有名な俳優から聞かされた話なんですけど、後で考えたらやっぱりそうだなと、納得がいきます。

次に、内か外か、つまり縄張りのことを取り上げたいと思います。私から見れば、中国人はどちらかというと、相手を認めやすいのではないかと思います。例えば、私が廣野先生と実際にお会いしているのは何年かに1回ぐらいですが、でも初めてお会いした時から意気投合していたから、友達としてお付き合いをさせていただいております。一旦友達と認めたらもう何でも話し合える間柄になります。これが中国人の一般的なやり方なんです。つまり、気が合えば国籍も身分も年齢も性別も関係なくて、友達として認めてしまう、つまり腹を割って話し合える仲になってしまうのです。一方、日本人の場合には、なかなか仲間に入れてもらえない一面があるような気がいたします。実際に日本の企業で働いている中国人からも、時々その話を聞かされますが。

逆に、中国人は、外国人を見る目と、中国人を見る目が違うように思われます。つまり、外国人がわれわれと違うのは当然のことなんですから、「この国の人は、こういうふうに物事を考えるんだ」「こういうふうには振る舞うんだ」と、比較的寛容というか、容易に相手のことを認めたり受け入れたりするのです。それに対して、日本の方は自分を物差しにして、相手のことを見るわけです。自分と同じだったら認めますが、自分と違っていたら認めない、場合によっては馬鹿にしてしまう、そういう一面があるのではないかという気がいたします。これはあくまでも私個人の感想なんですけど、もし間違っていたら、ご批判ください。

一方、中国人は、昔から言われてきたことなんですけれども、「不患寡而患不均(bù huàn guǎ ér huàn bù jūn : 寡(すくな)きを患(うれ)えずして均(ひと)しからざるを患(うれ)う)」と。これは『論語』にある言葉です。つまり、貧しくてもかまわないが、みんな同じように貧しければそれでいいわけです。ただし、こっちが貧乏で、誰かが金持ちだったら、それは許されない、不満に思うわけです。中国人は一見平等が好きなようです。要するに、みんな貧しければそれでいい。あるいはみんな一緒に豊かになればいいわけです。

でも、鄧小平は、一部の人が先に豊かになっていいという政策を出したおかげで、確かに一部の人は豊かになっているのです。でも今や貧富の格差がどんどん拡大されているのが現状です。一般の庶民は、もちろん前に比べて生活がだいぶ良くなってはいるんですが、それでも不満を持っているわけです。それもそれなりの理由があります。というのは先に豊かになった一部の人は、自分の知恵で、あるいは自分が一生懸命働いて豊かになったわけではなくて、やはり特別のコネで、あるいは人脈を利用して上手にやった、場合によっては賄賂でもやっていたので、富裕になった、そういうケースも少なくはありません。だから多くの中国人は「仇富(chóufù)」と言われるように、要するに金持ちに対してかなりの憎しみを持っているという現象が観察されます。

ちょっと話が変わりますが、男女平等について考えてみたいと思います。「男女平等」というのは、特に新中国建国後によく言われることのひとつです。一見確かにそうなっている一面もあるんですけれども、でも中国では女性の方が大変だと思うんです。職場では男性と同じように働かなければならないと同時に、家庭のこともやらなければならない。具体的には、子どもの面倒を見たり、親の面倒も見たり、夫の面倒を見たりしなければなりません。だから女性のほうが大変だと思います。

むしろ日本の場合は専業主婦が多いというか、奥さんが家庭にいらっしゃって、家のことをやっているのがある意味では合理的だと思います。中国の場合は最近、専業主婦も一部増えております。経済的に恵まれている人は、自分の女房を働かせないでうちに居てもらう、そういうケースが最近増えているようです。でも、一般の人はやはり共働きでないととても食べていけないから、夫婦で働いているんです。となると、女性のほうが結構大変だと思います。

それから進学するときもそうです。例えば、外国語志望や医学部志望の人は、やはり女子が多いし、そして往々にして女子のほうが成績がいいのです。そうすると、完全に成績順で採用すると、男女のバランスが崩れてしまうので、実際には女子の

ほうは男性より何十点も多くないとなかなか採用してもらえないというケースがよくあるそうです。だからこれは平等ではまったくなくて、悪平等なのです。

就職のときはなおさらそうです。だいたい私の研究室に居る院生は、女子が多いのですが、就職するときは、女性だから採用しないと公然と言っている大学まであるほどです。日本ではとても考えられないことでしょうか、中国の場合は「あ、女子なのか、それは採らない」というケースが非常に多いわけです。だから本当の平等ではないのです。逆に、定年退職の年齢は女性は男性より5年も早いのです。公務員の場合は男性が60歳で定年になるのに対して、女性は55歳です。労働者の場合は、男性が55歳、女性が50歳で定年になるのです。これは一見女性を優遇しているように見えるかもしれませんが、私から見れば、女性でも男性と同じ年齢で定年になってもいいのではないかと思うんです。現に、60歳になっても働ける人もいるから、別に55歳、あるいは60歳まで働いていただいてもよいのではないかと思います。

続きまして、陳謝と謝罪について考えてみたいと思います。まず、お礼を言うことについてですが、日本の方はとにかくよくお礼を言いますね。それに対して、中国人は、例えば友達同士で、私が友達にご馳走するとします。中国人の場合は、その食事の後に、基本的にお礼を言わないのです。お礼を言うと水くさいというか、他人行儀みたいなどころがあるから、友達同士だからお礼は言わない。「今回ご馳走になったから、じゃあ次は私がご馳走する」という感じで済ませるのです。しかし、日本人の場合はいくら親しくても、やはりご馳走になったら必ずと言ってよいほどお礼を言うんですね。中国人は本当に友達だったら、あまりお礼を言わないのです。そして、何かしてくれた家族に対してもあまりお礼を言わないのです。

謝るほうもそうなんですけれども、日本人は謝るのが好きなんです。でも政府が謝罪するかどうかは別の話なんですけれども、個人のレベルでは、何かあるとすぐ謝るんですね。中国人はそうじゃないんです。中国人は何かあると言いつけをするんです。とにかく中国人は言い訳が好きなんです。だから日本人と付き合いするときになるべく謝るように、私はいつも心掛けてはいるんですが、それでもなかなか日本人になりきれないですね。

もう一つ、例えば、私は今回は廣野先生には大変お世話になっておりますね。もちろん別れるときにお礼を言うんですけれども、日本人でしたら、今度メールを差し上げるときとか電話をするときとか、あるいは再会したとかいうときには、必ず前のことでお礼を言うんですね。これは日本人にとっての常識なんですけれども、中国人の場合はそうはまいません。前のことを基本的に言わないのです。つまり、

その場で済ませているから、また持ち出すと、例えば「この前どうもご馳走になりました」とか言う、「じゃ、もう一度ご馳走してくれ」というふうに聞こえてしまうかもしれないから、中国人は1回で済ませるわけです。だから日本人から見れば、こいつはちょっと礼儀知らずとか非常識だなと思ってしまうかもしれませんが、やはり発想が違うわけです。その違いを認識しておく必要があるように思います。

それから羞恥心なんですけれども、日本の文化は恥の文化とかよく言われるんですけれども、確かにそうかもしれません。それに対して中国人がメンツを大事にすることは先ほど申し上げた通りです。メンツがつぶれるととんでもないことになるんです。でも最近、中国人は恥知らずの人が増えているのも事実です。例えば、大学のキャンパスで学生のカップルがキスしたり抱き合ったりする光景は、多分廣野先生が北京大学のキャンパスではよく見かけられたと思います。電車や地下鉄なんかに乗っていても本当に傍若無人とか、周りの人が恥ずかしくなるようなことを平気でやっている、そういう恥知らずの人が増えているのです。

もう一つ、日本では絶対に見かけられない光景なんですけれども、地下鉄なんかに乗っていると、よく「お金を頂戴」と、こじきに来るんです。私は最初はお金をやったりしておりましたが、絶対そういう人にお金を与えないようにという車内放送が流れているのです。やはりみんなあげると、そういう人はまた来るとでしょう。とにかく「お金を頂戴」という乞食はあちらこちらで見かけます。しかし、日本に居て感心するのは、日本ではあんまりお金を頂戴とかそういう人は居ないでしょう。新宿の西口なんかでは浮浪者をよく見かけておりましたが、でも、お金を頂戴と言う人は一人も居なかったんです。乞食でもそれぐらいのプライドがあるんでしょうね。やはり感心しますよ。中国では、街を歩いていると、ひざまずいて、こういう感じで、あるいは中にお金が入っている琺瑯引きの茶碗を地面に置いてお金を乞う人を見かけるのは日常茶飯事です。通行人がお金をあげたりするんです。そういう人は、はっきり言って、いろいろなケースがあるようです。本当に困っているし、全然働くこともできないから乞食をしている人も居るでしょうが、実際にはだまし屋も結構多いようです。プライドさえ捨てれば、それはかなりいい商売のようです。毎月結構稼いでいるとか、いい額をもらっている人も居るとのことです。あるいはうまい具合に子どもを使って、後ろに大人の人が隠れているとか、そういうケースがあるのです。要するに、だましが多いということです。

最近、中国ではちょっと人間不信に陥っているケースが多いです。例えばお年寄

りの方が発作で道路に倒れた場合は、みんな助けようとするのが人の常でしょうが、この頃は、みんな躊躇するようになってしまっているのです。というのは、うっかり助けてあげたら、助けの手を差し伸べた人が、医療費を負担させられるなどして全責任を取らされることになってしまうことが多いからです。例えば、人が車にぶつけられて倒れているのを見かけて、通行人が助けようとしたら、その通行人の責任になってしまうんです。だから最近、誰か倒れた人を見かけても安易に助けようとしなのが普通になっているのです。まったく情けない話ですが。こんな世の中になってくると、さすがにみんな考えるようになったわけです。最近、「扶我卡(fúwǒkǎ)」というカードをぶら下げているが老人が現れているということです。つまり、「もし私が病気で倒れた場合は、助けていただいた人には一切責任を取ってもらわない」、そういうことが明記してあるカードをぶら下げてまで助けてほしいわけです。どれだけ人間不信になっているのかを如実に物語っている表れだと思います。はっきり言って変な社会になっているのです。私自身だって、何回かだまされたことがあるんです。オレオレ詐欺に遭っていたのです。だから、はっきり言って、何を信じていいのか分からなくなってしまいます。

次に、伝統文化への扱い方の比較になりますが、私から見れば日本は非常に伝統を大事にする国なんです。例えば、昔の建築、お寺、神社とかがよく保存されているんですけども、中国の場合は、そうではありません。例えば北京城、昔の北京のお城にはちゃんと城壁があったのです。それをそのまま残しておいて、西郊外のほうに行政の新しいエリアを造ることを、有名な建築学者で梁思成とって、梁啓超の息子さんなんですけれども、提案したわけです。でも当時の指導者に反対されたのです。その結果、北京の城壁は全部取り壊されてしまいました。そして、北京の代表的な建築で知られる四合院も、最近どんどん減ってきています。

それから、例えば北京の地名に「東単(Dōngdān)・東四(Dōngsì)・西単(Xīdān)・西四(Xīsì)」というのがあります。「東(Dōng)」は東のほうです。「単(dān)」は1つという意味なんです。それはどういうことかという、中国語では「牌楼(páilou)」とって、日本でいうと鳥居みたいなものです。それが1つだけあるものは東単なんです。それから東四は4つあるということなんです。東と西は左右対称になっているから同じ、1つ、4つ、1つ、4つ、そういう鳥居があったので、そういう地名ができたわけですけれども、でも今はただ地名として残っているだけで、そういう鳥居もとっくに取り壊されてしまって、昔の面影がまったく見かけられなくなっているのです。だから、中国では昔から古いものを大事にしない伝統があるのです。特にプ

ロ文革のときは、文化大革命ではなく、文化大破壊という時代でして、たくさんものが破壊されてしまったのが事実なんです。そういうところは中国と日本はかなり違うなど、いつも思っております。

それから教育のほうはどうだといいますと、日本は江戸時代から、寺子屋とか、教育を重視する伝統がありますよね。中国の場合はそうじゃないんです。教育のほうに使っている国の予算はやっと4パーセントぐらいになってきているんです。前はもっと低かったんです。地方に行くと、小学校の校舎は本当にボロボロのもので、いつ崩れてもおかしくないようなところで授業をやっているところもあるのです。

日本の場合は、例えば地震が起きた場合は、避難のときはみんな小学校とか中学校の体育館に行くでしょう。それは体育館などはきちんと建てられており丈夫だからでしょう。中国の場合は、まず体育館のある小学校は、名門校とか、あるいは私立の学校は別として、ほとんどないと言ってもいいぐらいです。教育のほうにもっとお金を使うべきなのに、先ほど申し上げたように、メンツになるようなインフラのほうに結構お金を掛けているのに、教育にはそんなにお金を出さない、これは非常に情けない話なんです。

それから中国の「科教興国 (kē jiào xīng guó : 科学と教育をもって国を興す)」というスローガンを出しているんですけども、私から見れば逆に「教科」、「教育」を先に持っていかなければならないです。教育がなければ、科学（サイエンス）はないんです。だから順序がおかしいと思うんです。ただ、このように並んでいるのは四声と関係あるかもしれないですけどね。「科教 (kē jiào)」のほうが言いやすいかもしれないです。でも論理的に考えると、先に教育があって、それから科学が成り立つわけです。

中国は、もう一つ日本と違うのは、スローガンが好きなんです。街を歩いていると、気がつくのは、街頭に掲げられている標語というかスローガンがよく変わることです。きれいごとがいっぱい並べられているんですけども、はっきり言ってそれもやはりメンツの見せかけなんです。そういうスローガンを真剣に受け止めている人はどれだけいるだろうか、疑わしいです。ただのスローガンに終わってしまう、そういうところがあるような気がします。

話が変わりますが、日本は学歴社会だとか言われて久しいですけども、中国の場合は日本以上の学歴社会になっているように思われます。例えば大学の教師を採用するときに、普通は博士号を持っていないと駄目なんです。しかし、それだけではありません。具体的に申しますと、学部はどういう大学を出ているのかを見るわ

けです。学部は一流の大学を出ていなければ駄目だということがあるのです。例えば、日本に留学して東大、あるいは京大で博士号が取れていても、学部は中国の三流大学しか出ていない場合は採用しないというケースがあるのです。これはやはり、ちょっとおかしいと思います。解放前の中国と比較することになりますが、昔は小学校しか出ていない人でも、ちゃんと北京大学の教授になれたんです。今だったらとても考えられないことです。やはり実力ではなく、何よりも学歴を優先する学歴社会になり切っているのです。これは一種の後退と言わなければならないでしょう。

更に、人材とは何かについて考えなければならないでしょう。中国人は昔から知識を重視しております。科挙試験の時代からもそうでした。隋の時代から始まった科挙試験では、本に書いてあることをどれだけ覚えているのか、どれぐらい知識を持っているか、それを見るわけです。本当の能力を重視するわけじゃないんです。これは中国の教育における一番大きな問題点だと思うんです。それは未だに改善されていないのです。

それから、頭脳流出というのが結構目立っています。うちの北京大学と隣の清華大学の卒業生がアメリカなんか留学して、結構アメリカのいい大学に入っている人が多いです。だからみんな、北京大学と清華大学はアメリカの大学の予備校だと、冗談まじりで言っているのです。確かに、できる人はみんなどどんアメリカに行って、それからアメリカで博士号を取って、もちろん帰ってくる人もいますが、そのままアメリカに残って研究したり、大学の教員になったりして活躍する人も結構多いわけです。頭脳流出は、本当に大きな問題だと思います。現状としては中国に戻ってきても、いろいろ制約とか制限があるからやりにくいという一面も確かにあるのです。それが改善されない限り、留学組は安心して帰って来られないでしょう。

もう一つは、外国留学の低年齢化も進んでいます。これまでは、高校を卒業して外国の大学に留学する、あるいは中国の大学を出て外国の大学の大学院に進学する、そういうのが一般的だったんですけども、最近は中学、あるいは高校の時代から留学する、そういうのが増えているようです。そういう人にとっては、将来的にはアイデンティティーが問題になって来るでしょう。

次にマナーの話に移りたいと思います。これは本当に大きな問題だと思います。廣野先生は経験なさったかどうか知りませんが、大学のキャンパスを歩いていると、自転車に乗っている学生が多いでしょう。特に放課後、非常に道路が混んでいるんですけども、自転車に乗っている人は、人にぶつかっても謝らないんで

す。謝らないで黙って去っていく、そういうケースが多いです。私自身も何回か経験しているところです。これはどういう教育を受けているのか、最低限のマナーも知らないのか、と言いたいぐらいです。そういう人が増えている感じがします。

それから日本の大学も今は結構やるようになってはいるんですけども、学生に先生のことを評価してもらおうですね。それは確かにプラスになるところもあるんですけども、逆に学生は、例えば自分の成績が悪いと、がらりと評価が変わるところがあるように思われます。自分にいい点くれたら高く評価する、自分があまりいい点が取れなかったら先生のことを評価しない、そういうところがあるから、学生による評価は一長一短なんです。

銭理群という魯迅研究の第一人者と言ってもいいぐらいの北京大学の看板教授がいらっしゃいますが、もちろん廣野先生もその方のことをよくご存じだと思います。その先生のお言葉をお借りしますと、今、中国の大学は上等な利己主義者を養成しているということです。つまり、今風の若者は利己主義者が多いわけです。自己中心で、自分のことばかり考えている、自分さえよければいいという感じの人が最近増えているのです。日本の大学生と違うのは、中国人の大学生は、ライバル意識が強いのです。いろいろなことで争っているのです。日本の大学生はあまりそういうことはないみたいですけども、中国人の大学生は周りの人をかなり意識しており、自分がいい成績が取れるようにがんばっている人、そういう人が結構居るわけです。一方、日本の大学生は、せっかく大学に入ったのにあんまり勉強しない人も少なくないようですが、悪いんですけど、中国の大学生はどちらかというと勉強する人が多いのです。

話が多岐にわたって、うまくまとまりませんでしたが、ご清聴ありがとうございました。